

12月の輸出は回復も伸びは鈍化

政策・経済研究部 エコノミスト 前田 和孝

1. 輸出の伸びは前月から鈍化

財務省から発表された12月の貿易統計によると、輸出金額指数は前年比+17.5%と、前月の同+20.5%から伸び幅が縮小した(図表1)。2年前比では+19.8%と、11月の+15.5%から拡大したが(図表2)、季調済前月比では▲0.2%と、3ヵ月ぶりにマイナスに転じており、総じて見ると輸出の勢いはやや一服した感がある。

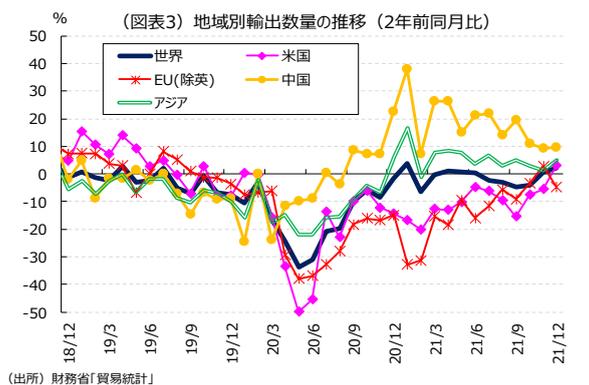
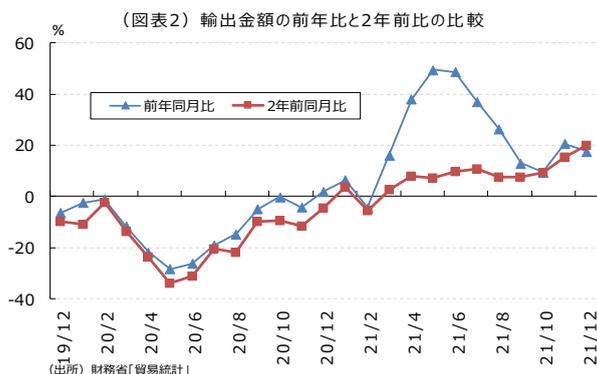
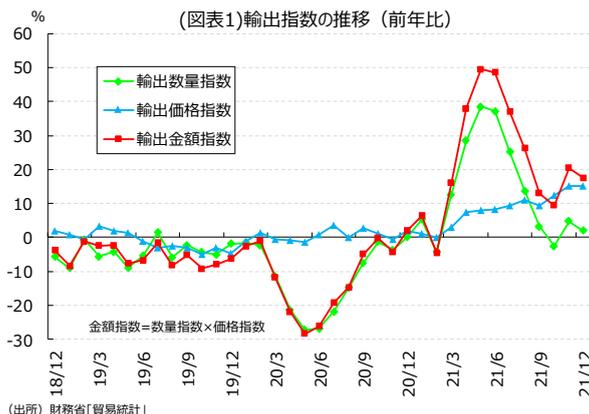
金額指数の前年比を価格と数量に分解すると、価格指数が同+15.2%、数量指数が同+2.0%で、価格指数の寄与が大きい。12月は円安基調が続いたためとみられる。輸出の実勢を示す数量指数は、前月の同+4.7%に続き2ヵ月連続でプラスとなった。数量指数は、2年前の2019年12月対比で見ても+2.1%と、プラスを維持している(図表3)。

2年前比と前年比の伸びは接近しており、過去数ヵ月の動きを追う限りにおいては、あえて2年前比に注目する必要性は薄れつつあるが、ここではコロナ後のトレンドを追うため、2年前比で主要相手国・地域別の動きを見る。まず、中国向けは12月が同+9.5%(11月:同+9.1%)と、3ヵ月ぶりにプラス幅を拡大させたものの、伸びは1桁にとどまった。EU向けは、前月に2年2ヵ月ぶりにプラスに転じたが、12月は同▲4.9%と、再びマイナス圏に沈んだ。一方、米国向けは同+3.2%(11月:同▲5.4%)と、2020年1月以来、1年11ヵ月ぶりにプラスに転じた。

2. 自動車輸出は好調を維持

以下、国別と品目別の詳細なデータが取得可能な金額ベースで見ると、米国向けは、構成比で28%を占める自動車が2年前比で+16.3%(11月:同▲5.6%)と、5ヵ月ぶりにプラスに転じ、半導体不足が最悪期を脱しつつある様子を示した(図表4)。その他の品目でも、25%を占める一般機械が同+27.2%、15%を占める電気機器が同+30.5%、7%を占める化学製品が同+10.0%と、軒並み2桁の伸びとなった。

EU向けは、構成比で15%を占める自動車が同▲24.0%(11月:同▲23.9%)と、マイナス幅がほぼ横ばいにとどまったほか、24%を占める一般機械が同▲5.8%(11月:同+7.6%)とマイナスに転じた(図表5)。



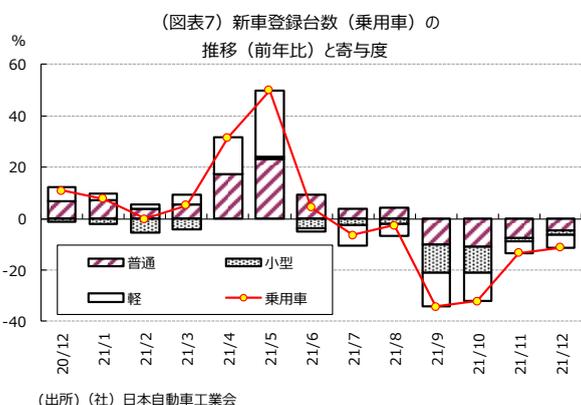
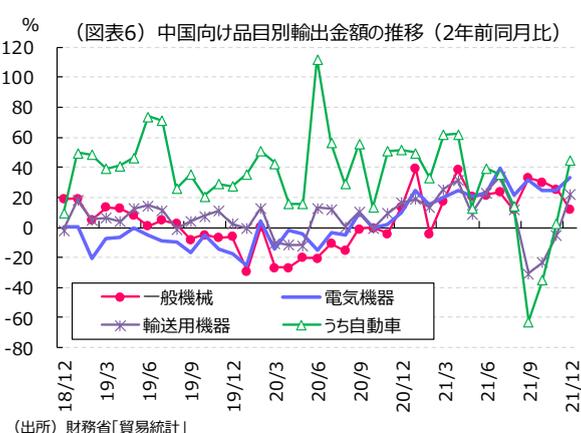
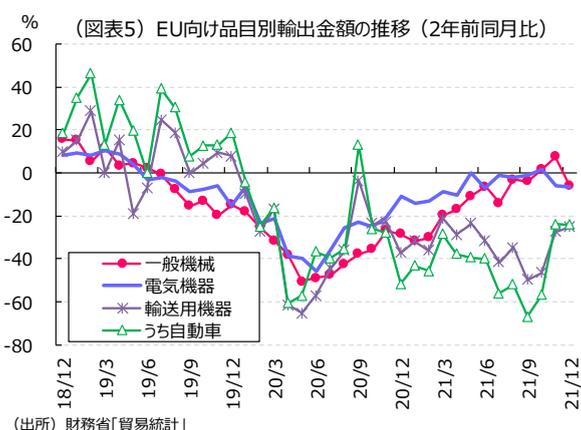
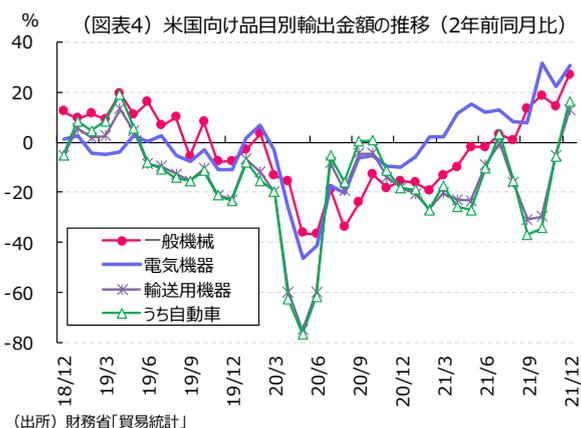
中国向けの自動車輸出の構成比は7%で、全体への影響は限定的だが、同+45.2%（11月：同+3.0%）と、伸びが大幅に拡大した。22%を占める電気機器も同+33.0%（11月：同+24.5%）と好調を維持した。一方、同じく22%を占める一般機械が同+12.0%（11月：同+25.6%）と、プラス幅を約半分に縮小させたことから、全体の伸びは小幅にとどまった（図表6）。

自動車輸出は前月の時点で回復の兆しを見せていた。しかし、世界的なオミクロン株の感染拡大により、東南アジアからの部品供給が滞ったことで、国内自動車メーカーが12月に相次いで工場の稼働を停止せざるを得なくなったことから、再び輸出が落ち込むことが懸念されていた。結果的には、日本国内の新車登録台数も12月は同▲11.1%と、前月からマイナス幅を縮小させており、同月の輸出への影響は限定的だったとみられる（図表7）。ただ、オミクロン株は引き続き猛威を振るっており、自動車メーカーのなかには、1、2月の生産調整を余儀なくされているところも出てきている。年初は再び感染症が輸出の抑制要因となる可能性が高い。

3. 通年ベースでは輸出入ともに大幅増

2021年通年の輸出金額は前年比+21.5%で、4年ぶりの2桁増となった。2年前比で見ても+8.0%となり、コロナによる落ち込みを取り戻した形である。春先以降、ワクチン接種の普及に伴い世界各国でロックダウンが解除され、反動増的な需要回復局面にあったことが、日本の輸出の回復に繋がった。ただし、年後半には半導体不足の長期化による自動車生産の落ち込みが、輸出の足枷となった。

輸入金額は前年比+24.3%で、2年前比でも+7.6%とプラスを確保し、コロナ前の水準を上回った。日本では、首都圏を中心に9月末までの大部分の期間で、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令されていた。そのため、欧米に比して相対的に景気回復が遅れ、年前半の輸入の増加ペースは輸出に比べて緩やかなものにとどまった。年後半にかけては、ワクチン接種の進展に伴い、経済活動が正常化に向かったほか、原油価格の上昇もあって輸入の伸びが拡大した。年後半の輸入の伸びは、円安進行も相まって上昇分のほとんどが価格指数の寄与によるものである。12月の輸入金額指数の前年比（+41.1%）を価格と数量に分解すると、価格指数が同+39.7%、数量指数が同+1.0%となっている。この結果、通年では輸入金額が輸出金額を上回り、貿易収支は▲1兆4,722億円と、2年ぶりに赤字となった。



主要国・地域別の輸出金額を見ると、米国向けが前年比+17.6%（2年前比：▲2.8%）、EU向けが同+21.4%（同+3.0%）、中国向けは同+19.2%（同+22.5%）と、前年比ではいずれもプラスの伸びを確保したものの、2年前比を見る限りでは中国向けの強さがうかがえる。

品目別に見ると、自動車は前年比+11.9%（2年前比：▲10.4%）と、前年比では伸びたものの、2年前の水準を取り戻すには至らなかった。一方、一般機械は同+24.7%（同+8.3%）と堅調で、内訳では半導体等製造装置が同+33.2%（同+35.9%）の大幅プラスとなった。電気機器は半導体等電子部品が同+15.7%（同+20.0%）となったことなどを受け、同+18.0%（同+15.2%）と2桁増となった。コロナ禍における世界的な半導体需要の増加が、一定程度輸出の下支えになった様子が示された。

2022年もコロナの変異株の感染拡大リスクは残ると予想される。もともと、先進国のほとんどは、強力な行動制限措置は課さず、ブースター接種の推進を優先するなど、「With コロナ」の政策運営を進めていく方針を示している。年初の段階では、オミクロン株の感染拡大の影響により輸出は低調となる可能性があるが、世界経済の回復基調は維持されるとみられ、年間を通じて見れば日本の輸出は緩やかな回復傾向で推移すると予想する。

※本レポートは、明治安田総合研究所が情報提供資料として作成したものであり、いかなる契約の締結や解約を目的としたものではありません。掲載内容について細心の注意を払っていますが、これによりその情報に関する信頼性、正確性、完全性などについて保証するものではありません。掲載された情報を用いた結果生じた直接的、間接的トラブルや損失、損害については、一切の責任を負いません。またこれらの情報は、予告なく掲載を変更、中断、中止することがあります。

●照会先● 株式会社 明治安田総合研究所 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-11 TEL03-6261-6411